

木曽三川 歴史・文化の調査研究資料

木曽三川

2014

夏

Vol.91

平成26年

地域の歴史

木曽川の景勝地

日本ライン右岸に開けた坂祝町

地域の治水・利水施設

坂祝町の農業用水と上水道

歴史記録

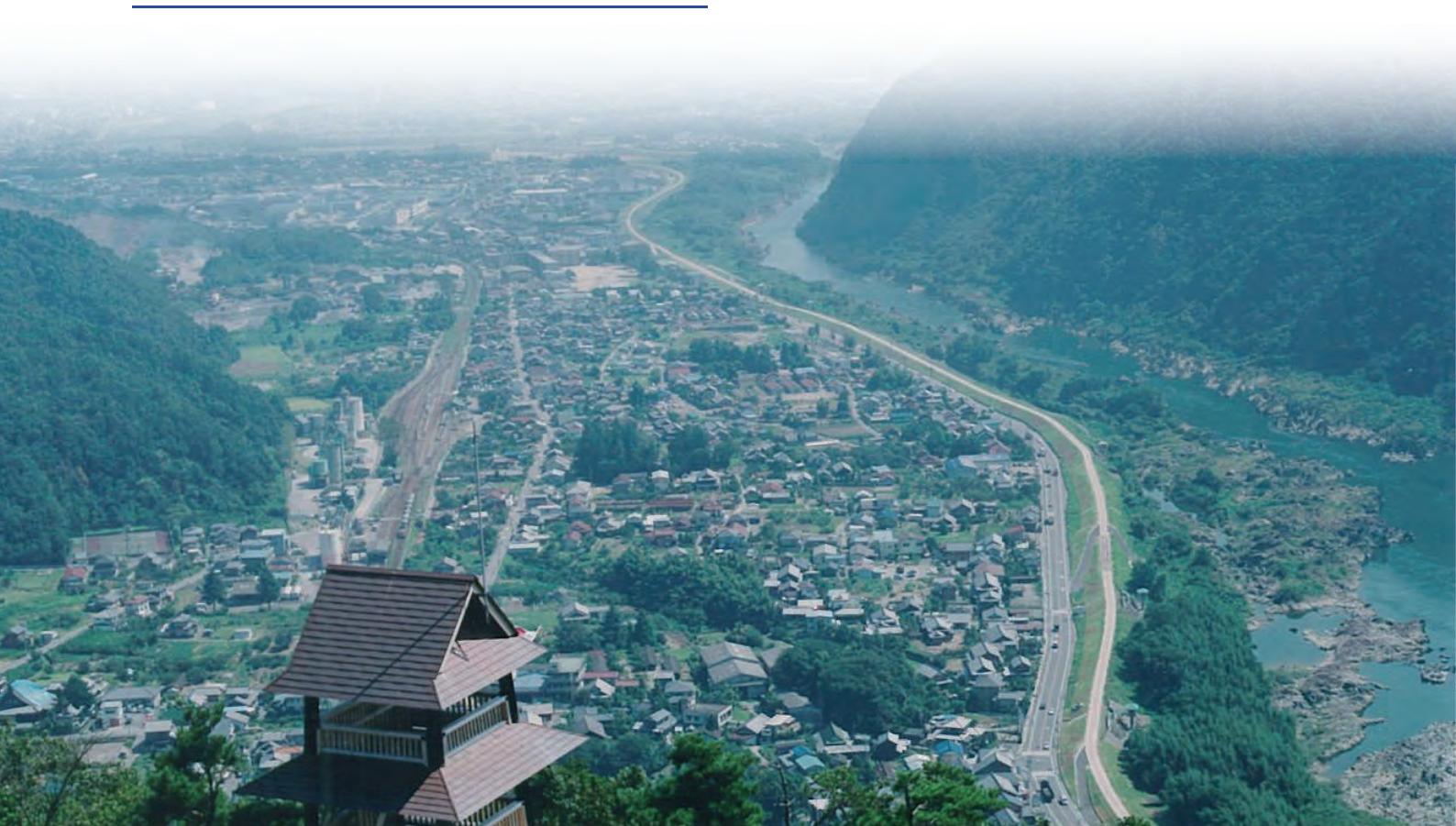
過去の災害を学ぶ 第一編

木曽三川下流域に影響した天正地震

研究資料

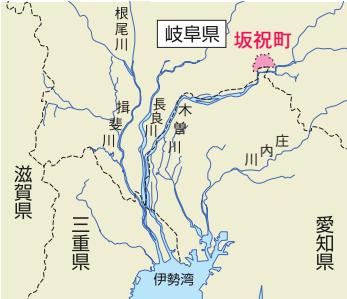
桑名市文化財保護審議会会長 西羽 晃

江戸時代の木曽岬開発の一端



木曽川の景勝地・日本ラ イン右岸に開けた坂祝町

町内に残る遺跡や古墳などから、この地方に古くから集落が形成されていたことが分かっています。町名は、式内社・坂祝神社に由来しています。江戸時代の町域は、中山道と木曽川舟運の接点であり交通の要地でした。



木曽川中流域右岸の町

岐阜県の中南部、町の南境を木曽川が西流し、対岸は可児市・愛知県犬山市、北部は美濃加茂市、西部は関市・各務原市に接しています。当地を流れる木曽川は日本ラインの景勝地で、飛驒木曽川国定公園に指定されています。町の中央部の郷部山を囲むように平坦地が円形に広がり、南部を国道二号とJR高山本線が東西に走っています。



火塚古墳

町域では、芦渡・大針・大林・黒岩に縄文遺跡が確認されており、木曽川河岸の芦渡遺跡では、縄文中期の土器とともに打製石斧や磨製石器などが出土しました。大林遺跡と黒岩遺跡では、縄文遺物のほかに弥生式土器片も見つかっています。古墳は、木曽川河岸の平坦地である取組・酒倉で一〇数基が確認され、酒倉の火塚一号古墳が上円下方墳で、そのほかは円墳です。



坂祝神社

平安末期以降、加茂郡内には多くの荘園が成立していますが、その大部分が藤原氏一門の荘園です。藤原氏は、大化の改新で天智天皇の側近を務めた中臣鎌足の子孫で、朝廷の権力者として一族が繁栄しました。中でも藤原兼家は、一族内の勢力争いに勝ち、一条天皇（九八〇～一〇一二）の外戚として権勢をほしいままにし、その子道長の時に全盛期を迎えました。当町域の深萱を中心とした深萱莊は、近衛家の祖となつた藤原基実の所領で、長寛元（一一六

年）に築造された豪族の首長の墓で、出土した鏡や玉は大和朝廷から首長に与えられたものと思われます。大和朝廷と当地域の関わりを示す史料や事績は見つかっていませんが、近隣の可児市や川辺町に景行天皇行幸の伝説にまつわる事績が残っており、当地にも大和朝廷の支配が及んでいたと考えられます。「和名類聚抄」に記されている賀茂郡一二郷のうち、当地がどの郷域であったのか確かなことはわかつていませんが、他の郷

坂祝地域の荘園

域との関係で小山郷とする説があります。延喜五（九一七）年に奏進された「延喜式神名帳」の中に加茂郡九座の式内社として坂祝神社が載っています。神社は大針集落西の加茂山南洞にあり、当時は坂祝地方の郷社としてあがめられていたと見られます。坂祝町の町名はこの神社にちなんでいます。

三) 年頃、絹の未進があるので上納するよう請求を受けています。

その後、代を経て藤原頼長に伝領されました。

（一五六）年、崇徳上皇を担いで後

白河天皇と合戦となり（保元の

乱）敗死し、その所領は没収され

深萱莊は後白河天皇御院領とな

り、後に京都長講堂（後白河法皇

院御所の一つである六条殿内の持

仏堂）領に組み込まれました。鎌

倉時代の領家は富小路中納言家で

あつたと推定され、さらに室町時

代となる文和二（一三五三）年に

は後光厳上皇が、深萱莊を三位局

（藤原実教の女か）に与えており、

応永年間（一三九四～一四七二）

の領家である藤中納言家も同じ流れと見られています。

交通の要地であつた坂祝



城山（猿啄城址）

木曽川に山地が迫り、美濃と尾張国境の交通の要衝に、標高二七六mの山城・猿啄城がありました。永享二（一四三〇）年に西村善政が築城したものを土岐氏の一族田原左衛門が奪つた、あるいは享禄三（一五三〇）年、田原左衛門が築いたとも言われています。天文一六（一五四七）年、同族の多治見修理が謀反して城を奪い、以後一八年間城しましたが、永禄八（一五六五）年、織田信長の美濃侵攻によつて落城しました。

信長は戦勝を祝つて城を勝山城と改名し、河尻秀隆を城主としました。

江戸時代に入ると街道が整備され、当町の木曽川沿いを中山道が通りました。太田宿（美濃加茂市）と鵜沼宿（各務原市）の間にあつて、勝山村・取組村・酒倉村・深田村は街道に面して民家があつび、荷物の付送りを生業とする者がいました。特に勝山村は、宿場の中間点にあたるので、間の宿（休憩場で宿泊りは出来ない）が設けられ、茶屋が立ち並び賑わつたそうです。国道二号沿いにある勝山の岩屋観音は、中山道を通る旅人から道中の安全を祈つて厚く信仰されました。

また、勝山には湊が設けられ、中山道の中でも河川交通と接する数少ない場所でした。地形的にも勝山と鵜沼間の道中には「うとう峠」があつて物資の輸送に苦労したので、勝山で舟運に積み替えることが多く、加茂郡の村々が幕府や尾張藩に納める年貢米もこの湊から木曽川を下されました。伊勢参りや東海道へ出る旅人もここから桑名湊まで乗船しました。

関ヶ原の戦いの後、当町域は、大針村が西尾備後守・伏屋飛騨守、黒岩村が郡主馬・山田信濃守、取組村が水原石見守、酒倉村が佐久間河内守・水原石見守と多

くの領主の知行地に分割されました。しかし、元和元（二六一五）年と同五年の美濃国諸村の尾張藩編入で、深田村・勝山村・酒倉

村・大針村・取組村・黒岩村の大

半が尾張藩領になりました。残る

深萱村は大半が幕府直轄領であつたので、全体としては尾張藩と幕府で占められており、当地が尾張に近いことに加え、交通の要地として重要視されたことがわかります。

坂祝町の誕生



安楽寺

明治二（一八六九）年の廢藩置県によつて、町域は江戸時代の領主によって名古屋県と笠松県に属していましたが、行政上不都合であったため、明治四年に美濃国の各県は岐阜県に統合されました。新政府は慶応四（一八六八）年

明治三〇（一八九七）年の新郡制施行を契機に、酒倉・大針・黒岩・深萱・勝山・取組・深田の7ヶ村が合併し坂祝村が誕生しました。その後、昭和二十五（一九五〇）年、深田地区が加茂郡太田町（現美濃加茂市）に編入され、さらに昭和四三（一九六八）年、町制施行により、坂祝村から坂祝町となり、県下で五一番目の町として誕生しました。

■参考文献

『坂祝町史 通史編』 坂祝町 平成一七年
『岐阜県の地名』
『美濃加茂市史 通史編』

『日本地名大辞典・岐阜県』
美濃加茂市 昭和五五年
平成元年 平凡社
昭和五五年 角川書店



八幡池（全国ため池百選）

木曽川の河岸段丘上に広がる坂祝町域は、慢性的に水不足で水田耕作に苦労してきた地域でした。木曽川は、耕地より低いところを流れているので取水が出来ず、木曽川に流入する谷水も少ないのに、専ら天水に頼っていました。何とか水を確保するために溜池を作り、その維持・管理に努力しました。このような溜池の築造や修理は、村の重要な協同作業として明治以降も常々引き継がれていました。江戸時代末から明治初年にかけての村明細帳には、酒倉村二・大針村二・黒岩村五・深萱村一八・勝山村一・取組村一の合計二九の灌漑用溜池数が記されています。

江戸時代から続いてきた水不足を解消するため、昭和二二（一九四七）年、古井町・太田町・加茂野村（三町村とも現・美濃加茂市）・坂祝村は、水源を飛騨川に

坂祝町の用水事情

木曽川の河岸段丘上に広がる坂祝町域は、慢性的に水不足で水田耕作に苦労してきた地域でした。木曽川は、耕地より低いところを流れているので取水が出来ず、木曽川に流入する谷水も少ないのに、専ら天水に頼っていました。何とか水を確保するため

に溜池を作り、その維持・管理に努力しました。このように溜池の築造や修理は、村の重要な協同作業として明治以降も常々引き継がれていました。江戸時代末から明治初年にかけての村明細帳には、酒倉村二・大針村二・黒岩村五・深萱村一八・勝山村一・取組村一の合計二九の灌漑用溜池数が記されています。

森山用水は、それまでの天水・溜池の水量不足を補うもので、用水だけで十分な水量を供給することは出来ず、さらに供給区域は限定了。

木曽川右岸用水の建設

そうした中で、この地方は昭和三四（一九五九）年、稀に見る大渇水に見舞われ大きな被害を受けました。これを契機に、坂祝村は美濃加茂市などと共に昭和三六（一九六二）年に「木曽川右岸用水期成同盟」を立ち上げ、国営に

坂祝町の農業用水と上水道

木曽川の河岸段丘に発展してきた坂祝町は、水不足に苦しめられました。水を求める苦労は、昭和五一年の可茂上水道、昭和五八年の木曽川右岸用水の運用が始まるまで続きました。



木曽川右岸用水の施設
※行政界は平成16年時点

木曽川右岸用水は、飛騨川上流の岩屋ダム（水資源機構が管理する多目的ダム）を水源として加茂郡白川町にある中部電力上麻生堰堤の上流280mの飛騨川右岸に取水口（一九八四）を設けて、白川導水路を経て川辺町で左右両幹線水路に分岐します。右岸幹線水路は、川辺町から美濃加茂市・富加町へ、坂祝用水路で美濃加茂市・坂祝町及び関市に配水されています。一方、左岸幹線水路は飛騨川

による用水事業の実施を求めました。そして昭和三八年度より直轄調査が開始され、昭和四三（一九六八）年度末に計画決定となりました。翌年には、受益地となる美濃

加茂市・関市・坂祝町・富加町・川辺町・七宗町・八百津町（すべて現地名）にそれぞれ木曽川右岸用水土地改良区が設立認可され、同年に国営土地改良事業の計画確定となりました。これに伴い事業の短期完成のため特別会計による水資源開発公団に事業継承がなされ、ここに待望の木曽川右岸用水事業が着工されました。



岩屋ダム

昭和三一（一九五六年）年の簡易水道敷設事業認可申請書によれば、坂祝村南部一帯は、井戸水の水位が木曽川の水位に影響されるため、夏季の渇水時に水不足となり、特に紡績などの工場が多量に揚水するので渇水する井戸が数多い。北部は、全般に井戸が浅く水质が悪い上に渇水期は南部と変りなく、衛生的にも非常に危険な状態であると記されています。

この申請は翌年認可され、五月四日に厚生大臣など列席のもと盛大な起工式がおこなわれました。簡易水道の計画は、水源を役場東側の畠地に深さ三〇mの井戸とし、水源井より揚水した水を郷部山中腹の配水池（貯水量一一三t）に送り、これより南下して役場付近で東西にわかれ、村内全域に供給するものでした。

茂市に配水されます。木曽川右岸用水事業は、総事業費約二〇四億円をもって、昭和五八（一九八三年）年に完成しました。

坂祝町の生活用水



山之上浄水場

た。工事の途中で、最初の水源井では水量が不足し第二水源が必要となつたこと、配水池の築造場所の変更が生じたことにより工期が伸びましたが、昭和三四（一九五九年）年に竣工となりました。

簡易水道の水源確保に困ついた坂祝町は、木曽川右岸上水道か

らの送水に切り替えるため、昭和五〇（一九七五年）年に郷部山中腹の中学校通学路の北側に、配水池の建設に着手、翌年に竣工し通水を開始しました。配水池は直径一五・四m・深さ七・五mのコンクリート造りのタンクで、追加減菌装置を備え、標高の高い場所に送水するための高所用ポンプ室も設置されました。

昭和五九（一九八四年）年に造成された加茂山団地の給水には水圧が不足するため、中学校駐車場の下に高区配水池を設置しました。この配水池への送水に高所用ポンプが使われました。

完成後も可茂上水道用水供給事

業は、平成七（一九九五年）年に上之山調整池、平成一二（二〇〇〇）年に上之山調整池（第二）を建造するなど拡張・強化を行い、平成一六（二〇〇四年）年にはほぼ同時期に供給を開始した東濃上水道用水供給事業（東濃用水道）と統合し、岐阜東部上水道用水供給事業に事業名を変更しました。



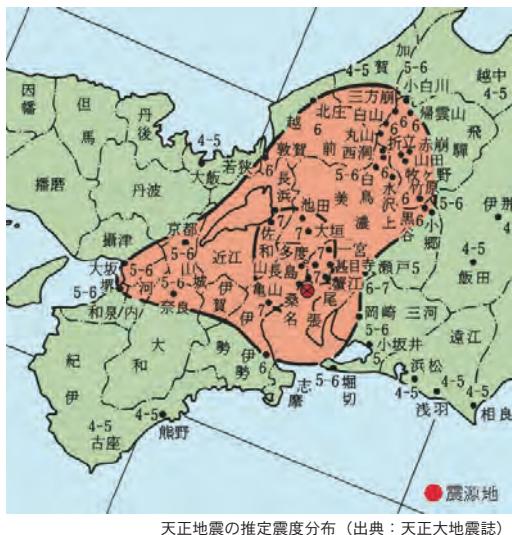
郷部山配水池

可茂上水道用水供給事業

難しくなつきました。

- 参考文献
『坂祝町史 通史編』 坂祝町 平成一七年
『美濃加茂市史 通史編』
『日本地名大辞典・岐阜県』
美濃加茂市 昭和五五年 平成元年 平凡社
昭和五五年 角川書店

木曾三川下流域に影響した天正地震



天正地震の推定震度分布（出典：天正大地震誌）

木曾三川下流域に大きな影響を及ぼした地震は、明応七（一四九八年八月の明応地震M8.6から昭和三一（一九四六年の南海地震M8.1まで九回も発生している。これらの地震の内、天正地震は、活断層が原因で発生した内陸直下型地震で、一月二九日（新暦一五八六年一月十四日）の二三時頃、震源地は木曽川河口に近い伊勢湾で（注）、津波の波高は木曾三川河口部周辺で二メートル、死者六〇〇〇人、三〇〇名、倒壊家屋八〇〇〇軒であった。震度六以上の震度分布は、西は大阪・京都・奈良、北は北陸の敦賀・福井、東は岡崎付近にまで及んだ大震災だと言われている。

この地震の傷が癒えぬ翌年六月二二日に、木曽川の流路を変動させた天正の洪水が発生した。地震による地盤の疲弊が洪水被害をさらに大きくしたことは、想像に難くない。

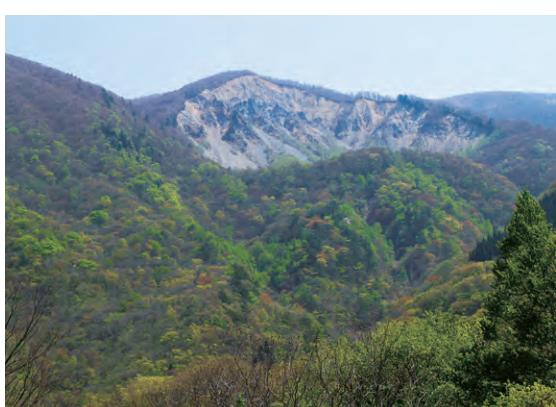
天正地震

（注）飯田汲事は飛驒白川谷付近での震災を二次災害と考えた。すなわち、伊勢湾周辺の臨海域および濃尾平野における城郭や寺院の倒壊状況、さらに、伊勢・三河などにおける余震の発生状況から、天正地震によって飛驒白川谷付近に発生した地震災害を、一九七〇年のペル・チンボラ沖地震の際に震央から約二〇〇キロメートル離れた氷河が崩壊したのと同じ二次災害と考えた。なお、地震規模は、震域の最大半径を三〇〇キロメートルするとM8.1、震度六の範囲の面積からはM8.2となる。

● 地震で破壊された城や出現した天然ダム

地震で破壊された主な城は以下のようである。

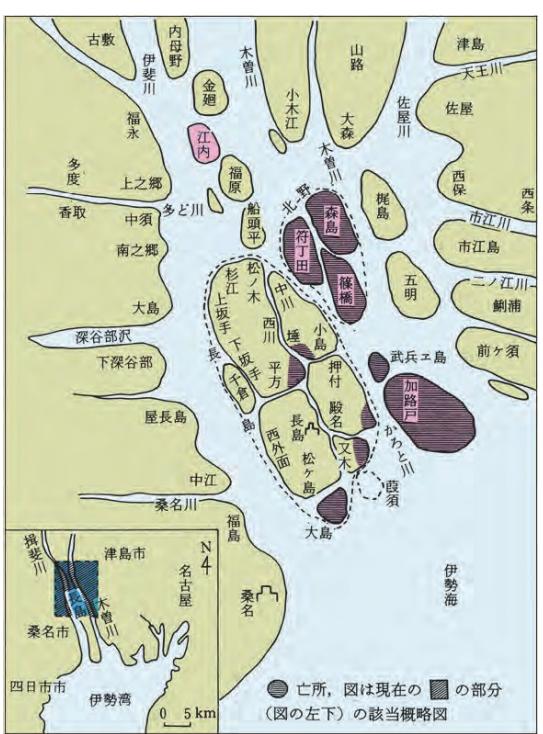
- ①滋賀県長浜市の長浜城は全壊し、山内一豊の一人娘与姫（数え年六歳）と乳母が圧死。
- ②大垣城は全焼消失、岡崎城は大破。
- ③桑名市長島町の長島城は悉く破壊されたが元の半分にも及ばなかつた。また、長島の篠橋砦（尾張大橋直上流の木曾川の川底）殿名砦（尾張大橋下流の木曾川の底）、加路戸砦（木曾岬町加路戸神社付近から城の遺物が発見されたが確定せず）も地震で亡失した。



帰雲山の崩壊地

壊され焼失。長島城は後に再建されたが元の半分にも及ばなかつた。また、長島の篠橋砦（尾張大橋直上流の木曾川の川底）殿名砦（尾張大橋下流の木曾川の底）、加路戸砦（木曾岬町加路戸神社付近から城の遺物が発見されたが確定せず）も地震で亡失した。

④帰雲山（一六二二メートル）の大崩落によつて大野郡白川村保



長島地域における亡所島々の推定位置分布
(出展: 天正大地震誌)

⑥富山県高岡市福岡町木舟にあつた木船城（貴船城）は三丈（約九メートル）程沈み崩壊、城主前田秀継夫婦以下多数が圧死している。

ところで、飯田は「長島は地震によつて百八里多以成川」との史料の記述に着目し、地震によつて河川堤防の決壊や土地の陥没、地盤液状化なども発生したが、「百八里」と広域な地域

木脇の庄川に天然ダム（注）が出現在した。約二〇日間流水が堰き止められ、上流三里（一二キロメートル）にわたつて湛水し、その下流の庄川は川原となつた。天然ダムの決壊を恐れた住民は小屋がけして避難したが、結果的には災害はなかつた。

この大崩壊で帰雲山対岸の帰雲城が埋没した。城主内ヶ島氏他数百名が圧死、家屋倒壊埋没は三〇〇余戸で、今もこの地には帰雲城の黄金伝説が言い伝えられる。

⑤白川村から遠く離れた恵那市上矢作町でも天正地震によつて天然ダムが出現している。

恵那山の南方に位置する長野県下伊那郡平谷村の大川入山（一九〇八メートル）に源を発する上村川は流域面積二一一平方キロメートル、流路長二五五キロ

メートルの河川である。平成一二（二〇〇〇）年九月に発生した東海豪雨（恵南豪雨）での最多総雨量五九五ミリメートルは、上矢作町字上村の槍ヶ岳（地名）の上村川周辺の洗掘入観測所で観測された。この豪雨で、岐阜県恵那市上矢作町の海（地名）の上村川周辺の洗掘された岸や河床から湖成層と大量の埋没木が確認された。

地質調査と埋木の炭素年代測定から、この堰止め湖は現在の惠な山体崩落が天正地震で発生し、上村川の堰止めで出現した堤高四〇メートル程の天然ダム湖に由来する、との説が提唱されている。

なお、天正地震発生二日前の天正越中地震で、白川村から約四五キロメートル庄川下流の現富山市砺波市庄川町金屋の前山の崩壊による天然ダムが二〇日間にわたつて庄川を塞ぎ、天然ダムからの出水は元の流路と新たな川筋（現庄川）の二筋を流れ下つた。

が「川になる」原因として、陸地への津波の襲来を挙げている。

桑名市長島町周辺での津波の発生

長島周辺での津波による主な被害は、
①地盤沈下した三つの島からなる北野（森嶋・符丁田・篠橋）が津波に襲われて湧没した。この地は元和年中（一六一五～二三年）に再開発されて北野新田となるが、明治改修で新木曽川の川底に沈む。

②近鉄名古屋線の現木曽川左岸南側に位置した加路戸（木曽岬町）に位置した加路戸（木曽岬町）が、地震による地盤沈下と津波で湧没。

③「なばなの里」北の現長島町駒江の大島新田が湧没し、元和三年（一六一七）年に大島新田を再興し、正保二（一六四五）年に駒江新田と改められた。また、西新田（長島町平方付近）も没亡。

近年、桑名断層の北端に位置するこの汰上地区でボーリング調査が行われ、天平一七（七四五）年の天平地震と天正地震によると考えられる堆積層が確認された。なお、宮城県名取市閑上（ゆりあげ）地区では東日本大震災で人口約七〇〇〇人のうち、約一〇〇〇人もの方々が亡くなつており、東北から遠く離れたこの地でも、天正の地震と津波が襲つていたことは悲しい偶然である。

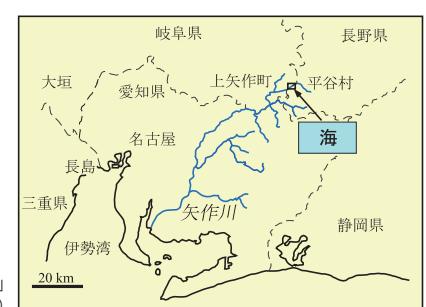
長島で倒壊・破壊した寺は、長島町間々で四寺、下坂手で二寺、長島町杉江と大島で各一寺であり、これらの寺は他地域に移転したり廃絶している。被害を受けた神社は長島町小島の稻荷社、押付の日高神社、さらに長島最古の八幡神社等である。

● 桑名市と宮城県名取市の「ゆりあげ」地区

周辺に残る天正地震の遺構

上述の長島以外にも、下流域では多くの寺院が倒壊しているが、地震を後世に伝える碑は極めて少ない。以下に、地震に纏わる寺院などを紹介する。

● 多度町徳蓮寺



には、明応地震と天正地震を記した釣鐘、伊賀上野・安政東海地震と安政江戸地震を記した供養塔が祀られている。



100段ほどの石段を登った中腹に建つ徳蓮寺

「諸国大地震横死万靈」供養塔



徳蓮寺は養老鉄道下野代駅側の山の中腹にある真言宗東寺派東寺宝嚴院末寺で虚空藏菩薩を祀っている。この地にあつた寺院（中蓮寺）が壬申の兵火（六七一年）に罹つて焼失し廃絶したが、弘仁一一（八二〇）年弘法大師がこの地に立ち寄り、虚空藏菩薩の像を刻み、多度神宮寺の別院として、徳蓮寺を含め五寺を建立した。

その後寺は大いに栄えるが、明応七（一四九八）年、この地を襲つた明応地震で大破、さらに、天正地震で堂塔が悉く潰れて、寺什・文書など全てが土中に埋もれ、僧尼も四散した。

慶長一〇（一六〇五）年、桑名藩主本多忠勝が寺領を寄進して寺は再興されたが、慶安三（一六五〇）年九月の大暴風雨で山が崩れ、境内は土中に埋まつた。万治二（一六五九）年下野代にあつた中蓮寺跡に堂宇を建立して再興し、この時、古刹であつた徳蓮寺と改称した。

・釣鐘

境内にある安永四（一七七五）年に作成された釣鐘（高さ二尺八寸余り、口径二尺）は戦中に金属供出されたが、戦後になり寺に返された。

釣鐘には寺暦などが記されており、「四の間」（正面の撞座の右横

が「一の間」、撞座の左横から「二の間」～「四の間」の銘文中に、「而明応戊午天正丙子重遇地震絡為」と記されている。

・石碑

鐘楼側に地震の碑「諸国大地震横死万靈」供養塔が祀られている。

正面右側に安政元（一八五四）

年六月一四日の伊賀上野地震と一月四日の安政東海地震の、左側に安政二年一〇月二日の安政江戸地震の日付が、背面に「當山住賢信建」と刻まれている。なお、安政元（嘉永七）年の安政東海地震の翌日に安政南海地震（一月五日）が続いて発生しているが、同碑では続発した二つの地震を区別していない。

建立者の賢信住職について、佐

野賢治は嘉永・安政頃（一八四八～五九年）の住職であると報告しているが、賢信住職がいつの時代の人か現時点で確認されない。また、「多度町史」は佐野による「賢信の年代」に基づき、この碑は安政二（一八五五）年に建立されたと記しているが、この碑の建立年も不明である。

なお、地震に関する碑ではないが、多度町下野代の土地改良の「完工記念碑」を多度町の郷土史家・中村雅春氏に教えて頂いた。碑の裏面に、昭和一九（一九四四年）年の南海地震によつて以前決壊した揖斐川堤防の野代樋門下流が再び破堤した。戦時中で地区



●長島町西外面の八幡神社

内に働き盛りの人夫がほとんど無い状態で、地区民総動員で購入した破堤地近くの田圃の土をトロツコ運搬して復旧した、と述べている。

参考文献
「天正大地震誌」
飲木和博 他七名
「天正地震（一五六六年）時の岐阜県上矢作荒における大規模山体崩壊」坂部和夫
「歴史地震 第二〇号 一〇五年」
「天正地震による前山の大崩壊」
長島城主や住民により、修復されて現在に至つている。

天正一三（一五八五）年一月二九日の天正地震で本社が大破し、天正一六（一五八八）年に再修が行われている。なお、神社には天正地震前年の天正一二（一五八四年）年に長島城主織田信雄が小牧長久手の戦勝祈願で奉納した

「多度町史 民俗」
多度町教育委員会 昭和五三年
「桑名市史 本編」 桑名市 昭和三四年
「三重県の地名」 平凡社 二〇〇三年
「寺院と鎧物」 福本桂太良 昭和五三年一月
「虚空藏信仰 民衆宗教史叢書第二四巻」 佐野賢治 雄山閣出版 平成三年
「多度町史 民俗」 多度町教育委員会 平成二二年

鎧・兜が保存されている。



平成二三（二〇一二）年三月一日一四時四六分一八、一秒に東北地方太平洋沖地震が発生してから既に三年が経過したが、まだ二、六三三名も行方不明（二〇一四年三月一二日時点）であり、東日本大震災はまだ続いている。

本稿が、三川下流域に影響を及ぼした地震の一部でも知ることが、将来発生するであろう地震への心構えの端緒なることを願つている。

江戸時代の木曾岬開発の一端

桑名市文化財保護審議会会長

西羽 晃



西羽 晃

昭和11年生まれ
和歌山大学経済学部卒業

現在
桑名市文化財保護審議会会長

木曾岬開発のあらまし

事 項		
1559	永禄2	加路戸開発
1625	寛永2	加路戸再開発
1628	寛永5	六反田、城三山開発
1638	寛永15	見入、大新田開発
1653	承応2	和泉開発
1654	承応3	外平喜、近江島、西対海地、東対海地開発
1655	承応4	小林開発
1661	寛文1	田代開発
1663	寛文3	小和泉開発
1669	寛文9	雁ヶ池、脇付開発
1672	寛文12	中和泉開発
1683	天和3	築留開発
1691	元禄4	福崎、松永、太郎地、白鷺、田代付開発
1697	元禄10	豊崎開発
1739	元文4	福崎再開発
1741	寛保1	雁ヶ地再開発
1743	寛保3	増田開発
1747	延享4	小林島開発
1752	宝暦2	豊崎再開発
1754	宝暦4	雁付、脇付を分割して開発
1755	宝暦5	脇付再開発
1756	宝暦6	富田子開発
1807	文化4	松永再開発
1808	文化5	太郎地再開発
1813	文化13	白鷺、白鷺山再開発
1819	文政2	源緑開発
1824	文政7	藤波（のちに藤里）開発
1858	安政5	小林島再開発

表1 木曾岬開発の歴史 ★ 資料によっては食い違いもある

『桑名郡志』によると、外平喜、新田について「元文年中（一七三六）四〇」当輪中一円幕府公領二ナリシとあつて幕府領になつたらしいが、それを裏付ける史料は見当たらない。

美濃や伊勢の幕府領を支配するため、笠松に代官所が設けられ、笠松郡代が幕府から派遣されていた。その最後の郡代が交代する慶応三（一八六七）年の引き継ぎ文書である「美濃郡代引継演説書」（『岐阜県史』所収）のなかで、次の文書（要約）

加路戸が鎌倉時代（一一九二～一三三三）ころから開発され、十六世纪ころには非常に栄えたが、天正十三（一五八五）年の大地震で破滅してしまった。十七世紀になって、まず加路戸が再開発され、引き続き南へ開発が進められ、十七世紀に豊崎まで十七、八集落が開発された。しかし正徳年間（一七一一～一五）の大洪水で破壊されてしまった新田も多い。十八世紀から十九世紀初めまでは破壊された新田が再開発され、新規開発は少なかつた。

十九世紀になると、再び開発が盛んとなり、新に源緑が開発された。その後も安政元（一八五四）年の大雨などで破壊され、その都度再開発がなされた。

史上最大の被害があつたのは昭和三十四（一九五九）年の伊勢湾台風で、海から押し寄せた高潮で江戸時代初期の状況に戻つたといわれる。その後に復旧し、さらに木曾岬干拓地が加わつて現状になっている。

幕府領から長島藩領へ

『桑名郡志』によると、外平喜、新田について「元文年中（一七三六）四〇」当輪中一円幕府公領二ナリシとあつて幕府領になつたらしいが、それを裏付ける史料は見当たらぬ。

これによると富田子新田などは文政十二（一八二九）年に幕府領から長島藩（藩主増山氏）に替えられたようである。三十九か村の具体的な村名は不明だし、二万石の長島藩に八八一二石という大きな石高が移れば長島藩の記録に出てくる筈だが、そのような記録が見当たらない。

延享三（一七四六）年の長島藩「領知目録」（『三重県史』所収）に記載がなくて、安政一（一八五五）年の長島藩「領知目録」に記載されているのは、富田子新田・富田新田・川先新田・小林嶋新田・築留新田・松永新田などである。延享三

が注目される。

一 桑名郡の富田子新田三十九村の合計高八千八百十一石三斗九升

一合は文政十二年十二月に長島藩増山河内守の領地に替わったので、村の諸帳簿類を引き渡した。

研究資料

(一七四六) 年から安政二(一八五五) 年の間に長島藩に替わつたことを示している。

衛は源緑新田へ引越したから、引続いて取締役を申付けた。白木金右衛門も同様に取締役を申付けたが、本人が病死したので、息子の唯四郎に取締役を申し渡した。

したら、許可された。葦の茂つてい
る海浜を開発して、櫛宜新田（のち
和泉新田と改称）が出来た。

松永新田は元禄四（一六九二）年、の開発だが、文政十年の幕府の検地帳が残つており、幕府領だった。そして文政十二（一八二九）年に長島藩に替わつたのである。

さるに次の「文（正邊の美濃郡代引継演説書）」が幕府領から長島藩領に変わつたことを示してゐると思われる。要約すると

この文では長島藩領になつた年号は書いてないが、上記の文政十二（一八一九）年のことであろう。この時に白鷺川以北は長島藩領となつたが、白鷺川以南の源緑輪中は開発後の年数も短くて、まだ安定しないし、しばしば高波の被害を受けるので、幕府領として継続したようである。

和泉新田の富田彦兵衛と西対海じいづみひこべいにたいがんも確実なので長島の新田古田五十八村の取締役を申付けて、この二人の印を押して願書を出すように申し渡した。しかし、両村とも共長島領に替わったので、富田彦兵

木曾岬開発の両家
—富田家と白木家—

海水が入り、海に戻ってしまった。翌年には復旧したが、持ちこたえられず、和泉新田二十四町余を売却したが、後に取り戻した。その後も風雨に悩まされながらも開発に務め明暦元（一六五五）年の大風雨にて海水が入り、海に戻ってしまった。翌年には復旧したが、持ちこたえられず、和泉新田二十四町余を売却したが、後に取り戻した。その後も風雨に悩まされながらも開発に務め

によると彼は尾張知多郡古見村（現知多市）に住んでいたが、富田家は美濃安八郡や石津郡、尾張海西郡に

土地を持つていた。その行き帰りに、木曽三川の河口を眺めて、ここ

を新田にしようと考へて、父の富田忠左衛門とともに慶安元（一六四

八）年に移つてきた。翌年に長島藩へ開発の願いを出しきが、許可され

なかつた。知多へ一度戻つたが、再び来て又木村に住んで酒造米の売買に従事した。のち開発の許可願を出

写真1 白鹭川案内版



寫真2 宝自之墓（酒盛院）



A weathered, rectangular stone monument stands in a dense, overgrown garden. The stone is light-colored with visible vertical grain and some surface wear. It rests on a low, square concrete base. The surrounding area is filled with various plants, including large green bushes and smaller leafy plants, creating a sense of age and neglect.

写真3 了清寺芭蕉句碑

外平喜新田の白木金右衛門が屋敷内に持仏堂を建てた。これが現在の了清寺の始まりであり、開祖は白木家四代目の正利了清（宝暦六〇一七五六年没）である。

寛延二（一七四九）年に外平喜新田の白木金太夫と白木金右衛門が三重郡塙浜村沖の埋立を長島藩に出願し、辰巳新田を開発した。当時の塙浜村は長島藩だつた関係からであ

現在、この句碑は源盛院境内に

五四〇五五年)に、白木平太夫(金太夫の隣)宅に工事の出張小屋が設けられている。

宝暦八(一七五八)年に白木金太

夫(一巴)が芭蕉の句碑を屋敷内に建てた。当時の屋敷の一部が後に了清寺になつたので、句碑はそのまま現在は了清寺の境内に建つてある。

安永頃(一七七二~八〇年)に白木金右衛門は赤地新田を所有してい

るし、安永五(一七七六)年には白木金太夫は都羅新田に出資してい

る。

文政二(一八一九)年源緑新田が

開発され、白木真弓が源緑新田へ移つてている。



写真4 白木家墓(了清寺)

昭和二十二(一九四七)年に公選初の木曽岬村長となり、昭和四十二(一九六七)年まで勤め、同年に名譽村民第一号に推戴された。

源緑輪中の開発と災害

源緑新田の開発は文政二(一八一

九)年に津島の堀田理右衛門と外平喜の白木真弓が開発を開始し、文政

七、八年頃から住民が住むようになつたといわれる。ここは加路戸輪中の沖合で葭が生えている州であつた。

加路戸輪中の間は深い瀬筋であつたかと思われ、そこが七里の渡しの船路となつていたようだ。源緑新田が開発されると、この瀬筋が白鷺川と言われるようになつたと、私は推測している。もつともあくまでも推測であつて、確たる裏付けはない。

源緑輪中は大きな川に挟まれており、洪水のたびに堤防は破損したが、弘化五(一八四八)年と嘉永三(一八五〇)年に破損した堤防は幕府役人が検分して、幕府の費用で以て復旧された。

嘉永七年六月十五日未明の大地震による高波に襲われ、源緑新田の堤防も破損し、耕地も海同様になつてしまつた。同年十一月にも大地震があつてさらに破損は拡大した。

近年は不作続きであり、自分たち

の力で復旧工事も出来かねてゐるうちに、翌年の安政二(一八五五)年八月二十日にも大風雨と津波で、またも被害を受けた。その時の歎願書(笠松陣屋文書)『新収日本地震史料』所収)では(要約)

恐れ乍ら書面にて歎願いたします。

勢州桑名郡源緑輪中村々は安政二年八月廿日の大風雨津浪にて、堤防が切れて海と同様になつてしまい、堤防の切れたり

ころでも大きく破損した場所は、自分たちの手での復旧は難しい。なにとぞ幕府の手で普請して頂きたくお願ひ申し上げます。

と、安政二(一八五五)年十一月に源緑輪中の地主惣代五人と村役人林右衛門(白木)唯四郎が添印し、富田彦兵衛が奥印して、幕府の費用で復旧工事をしてほしいと笠松代官所へ嘆願書を出している。

この結果、幕府から手当金が出されて復旧した。万延元(一八六〇)年五月十一日にも大風雨で堤防が切れた。この時も幕府から手当金が出され、文久二(一八六二)年三月までに堤防は復旧した。

(一九九八年 木曽岬町役場発行)

『三重県史(資料編近代1)』(一九八七年 三重県発行)

『輪中と高潮—伊勢湾台風の記録—全 所収』(一九八二年 三重県資料刊行会発行)

『木曽岬町史』(一九八七年 三重県発行)

『四日市市史(第十七巻 通史編近世)』(一九九九年 四日市市発行)

『三重県史(資料編近世2)』(一九九九年 三重県発行)

川は締め切られ、加路戸輪中と源緑輪中とは陸続きとなつた。

昭和三十四(一九五九)年九月二十六日の伊勢湾台風では松永に五・一八メートルの高潮が襲い、堤防は崩れ、海水が一面に浸水した。源緑輪中(白鷺・源緑・上藤里、松永・下藤里)で、この災害で亡くなつた人は一一九人を数えた(『木曽岬町史』)。

参考文献

『岐阜県史(史料編 近世)』(一九六六年 岐阜県発行)

『長島町誌(上巻)』(一九七四年 長島町教育委員会発行)

『新収日本地震史料(第五巻別巻三)』(一九七六年 社団法人日本電気協会発行)

『桑名郡志(上・中・下巻)』(一八八七年頃 江間政発著)

『長島町誌(上巻)』(一九八〇年 歴史図書社復刻発行)

『川崎敏「木曽岬輪中の地形と高潮—伊勢湾台風による被害」』(一九八二年 三重県資料刊行会発行)

『輪中と高潮—伊勢湾台風の記録—全 所収』(一九八二年 三重県資料刊行会発行)

『木曽岬町史』(一九八七年 三重県発行)

『四日市市史(第十七巻 通史編近世)』(一九九九年 四日市市発行)

『三重県史(資料編近代1)』(一九九八年 三重県発行)

『木曽岬町史』(一九八七年 三重県発行)

『四日市市史(第十七巻 通史編近世)』(一九九九年 四日市市発行)

『三重県史(資料編近世2)』(一九九九年 三重県発行)

さらに次の代(正光)(明治二十二年~昭和五十二年=一九七七年)は

お富・与十松の夫婦岩（坂祝町取組）

むかし、坂祝町の取組には渡し場があつて、栗栖（犬山市）との間を渡し舟が行き来していました。この辺りの木曽川は流れがはやく、景色が美しい場所で、向こう岸に大きな岩が二つ並んでいます。

この大きな岩の上で、お富といふ栗栖のお大尽の一人娘が琴を奏でていました。

ある日のこと、琴の音に誘われて岩にやつてきた大工の与十松が、お富の美しさにすっかり夢中になつてしまい、それからは、仕事もわざれて、お富に会いに行きました。

お富も与十松を憎からず思い、毎日岩の上で琴をひき、与十松と楽しく語らうようになりました。

ひかれあう二人でしたが、お大尽の一人娘と大工職人では身分違いも甚だしく、親の許しがもらえるはずもなく、二人の思いがとげられることはあります。

二人の行く末を悲観したお富は、木曽川の水がいつにもまして増えてきた日に、琴をひくのを突然やめて、急流に身を投げてしまいました。

それを知った与十松は、岩の上でお富の名を呼び続けましたが、岩にぶつかる水の音が琴の音に聞こえるばかりです。こうしていく日かがすぎ、嘆き疲れた与十松も川に身を投げ、お富のあとを追いました。

それ以来、この岩にぶつかる水音が、美しい琴の音に聞こえるようになりました。その音色はとても悲しく、聞いた人はみな涙を流しました。そこで寂光院の住職が、二人のためにお経を唱え供養をしたところ、琴の音は聞こえなくなりました。この二つの岩は、お富・与十松の夫婦岩と名付けられました。



木曽川文庫利用案内

ヨハニス・デ・レイケに関する文献など約4,500点の図書などを収蔵、木曾三川の歴史を知るために、多くの方々のご利用をお待ちしています。



《開館時間》

午前8時30分～午後4時30分

《休館日》

毎週月・火曜日（月・火曜日が祝祭日の時は翌日）・年末年始

《入館料》無料

《交通機関》

国道1号尾張大橋西詰から車で約10分

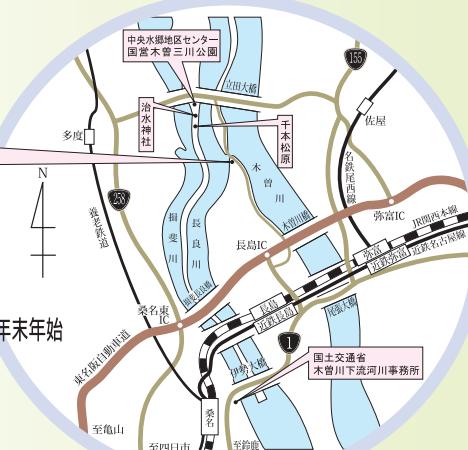
名神羽島I.Cから車で約30分

東名阪長島I.Cから車で約10分

木曽川文庫へのお問い合わせは

〒496-0946 愛知県愛西市立田町福原
TEL.0567-24-6233 FAX.0567-24-5166

Mail sendouhi@dream.ocn.ne.jp



KISSOホームページ
<http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/index.html>

Johannis de Rijke の日本語表示については、かつては「ヨハニス・デ・レーク」と呼ばれていましたが、「KISSO」では、現在多く使われている「ヨハニス・デ・レーク」と表記しています。

編集後記

歴史記録は、今号から4回にわたり、過去の災害を学ぶをテーマとして、私たちが忘れてはならない自然災害を掲載します。

なお、この資料は、創刊号からの全てがKISSOホームページよりダウンロードできます。

表紙写真

上

「坂祝の夫婦岩」

木曽川の中でも坂祝町一帯では、侵食や風化作用により様々な形をした奇岩を見ることができます。

この夫婦岩もその中のひとつで、民話の世界にも登場しています。

下

「猿啄城から見るロマンチック街道と木曽川」

岐阜県美濃加茂市から愛知県犬山市に至る木曽川の流れは、「日本ライン」と呼ばれ飛騨木曽川国定公園に指定されています。

その沿川にはロマンチック街道が全長4キロにわたり整備され、景色を眺めながらゆったりと散策することができます。

『KISSO』 Vol.91 平成26年8月発行

編集 木曾三川歴史文化資料編集検討会（桑名市、木曽岬町、海津市、愛西市、弥富市ほか）

発行 國土交通省中部地方整備局木曽川下流河川事務所調査課

〒511-0002 三重県桑名市大字福島465

TEL(0594)24-5715 ホームページ URL <http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/>